

第2回シンポジウム 趣旨と概要

小谷 汪之

本シンポジウムでは、「インド的文明」の展開を長い歴史的射程において包括的に見通し、それを通して、「インド的文明」を本質論（本質還元論）的にではなく、その歴史的動態にそくしてダイナミックに捉えることを目指した。

辛島昇・小谷汪之「対論」は南アジア史における中世的世界の形成とその構造・動態に関するもので、その主要な論点は、土地所有関係史（土地制度史）やカースト制度の位置づけである。

他方、沼田一郎・永ノ尾信悟両氏の報告は、インド学研究の立場から、「法」の発展過程と、「儀礼」の変容過程を通して、「インド的文明」を通観しようとしたものである。沼田報告では、『マヌ法典』が現在のような形をとった紀元前後の時期に、大きな社会的・文化的転換があったのではないかという見通しが語られた。永ノ尾報告では、「グリヒヤストラ補遺文献」と称される一群の文献の重要性が語られた。なお、永ノ尾報告は他の場所に発表されることになっているので、ここでは、その「報告要旨」とレジュメだけを収録する。